こどものまなざし

2023 年 6 月
＜10 号＞

～子どもの自立を願い、笑顔を共有する～

視覚障害は比較的数が少ないため、子どもの相談機関は少ない現状があります。公的機関としては、各都道府県にある盲学校（特別支援学校の視覚障害教育部門）が大きな役割を果たします。病院で目が見えていないかもしれない、あるいは見えにくいと指摘されても、どこに何を相談してよいのか分からず、不安な気持ちを抱えて乳幼児教育相談に来られる方もいます。そのため、乳幼児の保護者の相談では、子どもへの直接的な支援のみならず、保護者支援を行うことも重要な役割として担っています。

相談に来られる方の中には、早くて生後数か月から通っている子どももおり、最初のうちは新しい場面になかなか慣れることができずに、保護者から離れられないこともあります。しかし、回数を重ねていくうちに、徐々に担当者に慣れ、活動内容の見通しも持てるようになり、お気に入りの歌や遊びができてきます。

通い始めてしばらく経つと、子どもが保護者の膝の上から離れる時間も長くなり、ともすれば保護者の存在を忘れているかのように活動に夢中になることもできるようになってきます。そうなると、保護者は子どもの後姿を見る時間が長くなります。

あるお子さんのそんな様子を見て、「自分でできることが本当に増えてきましたね。」と声をかけたところ、保護者ははっとした表情で「本当ですね！」とお返事をされました。少し体も大きくなって、ようやく安心して見守ることが増えてきた時期のことでした。

そのお子さんの保護者は、この子の将来はどうなるのだろうという不安を感じる間もないほどに、毎日を乗り越えるので精一杯でした。いつも笑顔を見せていましたが、ずっと張りつめていた気持ちで過ごされていたことを私たちは感じていました。そう返事をされたあと、保護者は子どもに近づいて携帯電話で写真を撮りながら、そっと目元を拭っていました。

相談の場では、家庭とは異なる場所の構造、おもちゃ、活動など、初めて経験することも多いです。見えにくさがあると、環境を素早く把握することが難しいので、子どもは不安を感じやすくなります。しかし、じっくりと時間をかけて、音を聞いたり壁を触ったり、顔をくっつけるくらい目を近づけて遊具を見たりすることで、部屋の大きさ、遊具等の位置を把握します。そうすることで、安心して身の回りのことに興味を持ってかかわっていけるようになります。

乳幼児期は、一緒に触れあい楽しむことが重要です。それなくして、焦りなどから〇〇ができるようにならないと！と躍起になってしまうのは、子どもの“お母さんやお父さんと触れ合い楽しみたい”という気持ちに目が向かず、親子の信頼関係を築く妨げになってしまいかねません。

幼い頃に親子の触れ合う経験を積むことが、のちに子どもが自立する力を育む土台として重要です。しっかりとした土台を作ることで、子どもはさまざまな活動に参加し、生き生きとした表情で「見て！見て！」と体験を共有してくれます。そんな子どもと保護者が笑顔で見つめあう様子を見たとき、私たちは親子の愛情を間近で感じ、表現できないほどうれしい気持ちになります。